

追悼 木村浩先生

佐々木 毅

(国立教育政策研究所名誉所員)

2015年11月1日に、城西大学水田記念図書館名誉館長であった木村浩先生が急逝された。82歳。間もなく83歳を迎えられるという時の事であった。この日は、城西大学開学50周年の記念式典が予定されており、先生もこの式典に出席される予定であったのが、数日前から体調を崩されて、取りやめられたそうである。入退院を繰り返されていたことは存じていたが、あまりにも突然の訃報であった。

先生は1932年11月14日に大阪で生まれられ、1951年3月に千葉県立佐倉第一高等学校を卒業されたのち、千葉県印旛郡根郷村立根郷中学校に助教として勤務されながら、日本大学通信教育課程で勉強された。1955年に日大を卒業されたのち、千葉県立一宮商業高校教諭に就任され、千葉県立東葛飾高校教諭、千葉県教育センター研究員、千葉県立船橋高校教諭を歴任され、またこの間東京大学の大学院、オックスフォード大学で研鑽を深められた。1977年に国立教育研究所(現・国立教育政策研究所)に転任され、英国の教育の研究を進められたほかに、国際的な教育会議の運営や国内の研究活動のとりまとめに従事された。1993年に国研を勇退され、城西大学の経済学部教授、大学院経営学研究科教授、図書館長などを歴任された。

単著、共著合わせて12冊の著書を残されたが、特に重要なのは2006年に東信堂から出された『イギリスの教育課程改革——その軌跡と課題』であろう。これは戦後のイギリスの教育の動向についての先生の御研究を教育課程に焦点を当てながらまとめた書物である。先生は長年、千葉県で教職に就かれ、中学校と高校で英語を教えられ、空手部の顧問をされたりしたが、その当時の生徒の皆さんからずっと同窓会に招かれるなど、卒業後も慕われ続ける人間味あふれた教師であった。そういう現場での経験が先生の研究にも反映し、実際にイギリスの教育の現場を訪れ、関係者の生の声を集める努力を続けられたことを、後進の研究者たちは忘れてなるまい。

私が先生のお名前初めて接したのは、1976年の箱根で開かれた比較教育学会でまだ船橋高校に在職されていた先生が発表された時であった。本格的な接点できたのは、先生が研究所の所員となり、イギリスの教育の研究、さらに内外のイギリス教育研究者との交流とネットワークづくり、内外の教育関係者の交流に取り組みされるようになってからのことである。そのような活動の中で、忘れてはならないのは、1980年に埼玉県嵐山町の国立婦人教育会館で世界比較教育学会が開かれた折、先生のお世話で日本とイギリスの比較教育学研究者の集まりがもたれたことであろう。日英教育学会の骨格をなす研究者のネットワークのかなりの部分が先生による

ものであることを否定するものはいないだろう。

実は、世界比較教育学会の開催についても、当時国研の所長であり、日本比較教育学会の会長であった平塚益徳先生の指示を受けて、欧州各地を転々として工作に努められたというような話を漏らされたことがあり、そのうち詳しい話を伺おうと思ってそのままになってしまった。また、私の師である兵頭泰三先生と、国研に勤められていた成田克矢先生の交流の様子を懐かしそうに語られていたことがあり、これももっと詳しくお聞きしておきたかったことである。これらは先生のご経歴、ご業績を語る上では挿話的な話題であるかもしれないが、先学から学ぶことのできる機会は大いに利用せよという教訓として、書きとどめておく。

優れた研究者でもあり、教師でもあった先生を失ったことは惜しんでもあまりあることであるが、先生の残された研究上、研究組織上の様々な業績をどのように継承・発展させていくかが後に続くものに託された課題であることを忘れてはなるまい。